名古屋学芸大学短期大学部　研究紀要　第８号　2011：43-58

《論文》

シラバス解説法を基礎とした学修成果向上策の研究*
―所属学科のポリシーを俯瞰させ体系的学力を培う―

Learning Outcomes' Improvements based on the Syllabus Analysis Method
― Overlooking the Departmental Policy for Developing Systematic Scholastic Abilities

黒　澤　宣　輝**
KUROSAWA Nobuteru

Summary

The teachers consider a systematicness and a continuity of the learning and effectiveness in a stage to devise a new student acceptance policy, a course of study formation policy, a policy about the laureation enough.

However, doubt stays whether it is performed as they were decided at the stage that teachers practice this consideration matter, the stage to evaluate learning outcome again beforehand.

On the other hand, it is considerably difficult to overlook what students should do for oneself along this after understood these consideration matters.

Therefore, at first teachers consider over a consideration matter again.

And, based on this, it is necessary for teachers to explain these to students at the time of a semester start and all over the period and the end. And it is necessary to grasp how students understood it.

In addition, teachers let a student evaluate it by oneself, and it is necessary to intervene with support of the education that accepted degree of understanding of students.

The proof to advocate this necessity depends on the next hypothesis. In other words it means that "the learning outcome that is expected if a student overlooks the content that self should learn is provided".

It is the next matter that I finally want to clear it. To become independent in the future, what should the students acquire? For that how should teachers support students?

はじめに

教員側が所属学部・学科のアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育の実施に関わる方針）、ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）を策定する段階では、学習の系統性や連続性、効率性に十分な配慮をしているが、これを実践して行く段階、評価する段階では当初の理念通りに行われているかどうか疑問の残るところである。学生がこれらのポリシーを知る機会は、多くの場合シラバスを通して、あるいは年度初めの学部・学科説明会や、各セメスタの開講時に担当教員が行う講座内容の説明であろうが、ここでは時間的制約や学生の予備知識不足もあって、学生が自分の属する学部・学科における入学から卒業までのポリシーや、学ぶべき科目群の関連を理解し、自ら知育・徳育・体育にわたって望まれる学生像を俯

＊　2010年12月10日受理
＊＊　名古屋学芸大学短期大学部

瞰することはかなり難しいと言えよう。したがって各科目の担当教員が該当学部・学科のポリシーや科目群の関連を熟知・熟考した上で、セメスタの始まり、学習の途上、及びセメスタ終了時、担当科目の位置づけとシラバスの解説をし、これを学生がどのように理解しているかを把握する必要がある。また、学生自身には何をどのように捉えているか自己評価させ、理解内容に応じた教育的支援・介入をする必要がある。この必要性を唱える裏付けは、「学生が自己の学ぶべき内容を俯瞰すれば、望まれる学修成果が得られる」という仮説であり、シラバス解説法と題する核心はここにある。最終的には学生が卒業して自立して行くために、何をどのように身につけて欲しいか、そのために教員団は何をどのように支援すべきかを論考する。

1．論文の構成

この項では教員としてまた学生として、上述の課題にどう対応したら良いかを考察する手順について述べる。

「2．学習構造の静的概念」では、上記3種のポリシー、教員、学生を主要素とする学習構造の静的全体像を想起しその関連を示す。

「3．学習構造の動的概念とその要素」では、全体像の中の要素を動的に捉える。教員及び学生個々が、何を共通基準として行動するかを想定し、行動の考察には「自己調整学習の理論」を参照する。行動の内容はPDCAに基づくフィードバック、メタ認知、ポートフォリオをもとにして論考する。

「4．評価の観点を意識化させるシラバスの工夫」では、シラバスの解説法として筆者が試行している具体例を提示しながら考察する。想定した行動の共通基準は、知育・徳育・体育の3軸を、さらに自己の範囲・自己を超越した範囲の2軸から分類した計6軸であるとしている。学習の到達基準・評価方法は、この6軸を基底として据えることが望ましいと考えている。一科目の講義と考査が終了したら、その時点で学生に何を自己評価させ、何をまとめさせ、望まれている学生像をどのようにして俯瞰させるか、また教員としてはどのような教育的支援・介入をすべきか述べる。

「5．シラバス解説に係る教員団の合意形成」では、キャリア教育を視野に入れた場合、筆者がシラバスの解説に6軸を定義して「どの科目にも共通する学修法の形式陶冶」を図ろうとする構想が、「キャリア形成のための形式陶冶」と類似した構想であることに気づいたこと。したがって、シラバスの解説法を皮切りとした教育的支援・介入を、いかに教員団の合意形成のもとに行うべきかの重要性を述べる。筆者は「ポートフォリオ指導」という講座を実践する中で、教育的支援・介入をするにあたり、いかに教員団の合意形成が大切かを実感しているのでこれについて述べる。

「6．学修内容の体系化と有機的結合」では、学生が卒業するに当たって自立を実現するための総仕上げを、教員団としてはどのような観点から支援すべきか概念を述べる。

2．学習構造の静的概念

アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと教員・学生の関係を学習構造全体の「ある時間断面」で捉えたのが図1である。上部の楕円Ⅰでは、教員団が望まれる学生像を具現化するため学部・学科の3つのポリシーについて協議し合意することを示している。楕円Ⅱでは、教員団が合意した3つのポリシーを教員団としてどんな方法で実践に移し、どのように評価し、どのような形で教育的支援・介入をするかについて合意することを示している。楕円Ⅲでは、学生が自分の所属する学科のポリシーを自ら、あるいは教員に指導を受けて理解することを示している。

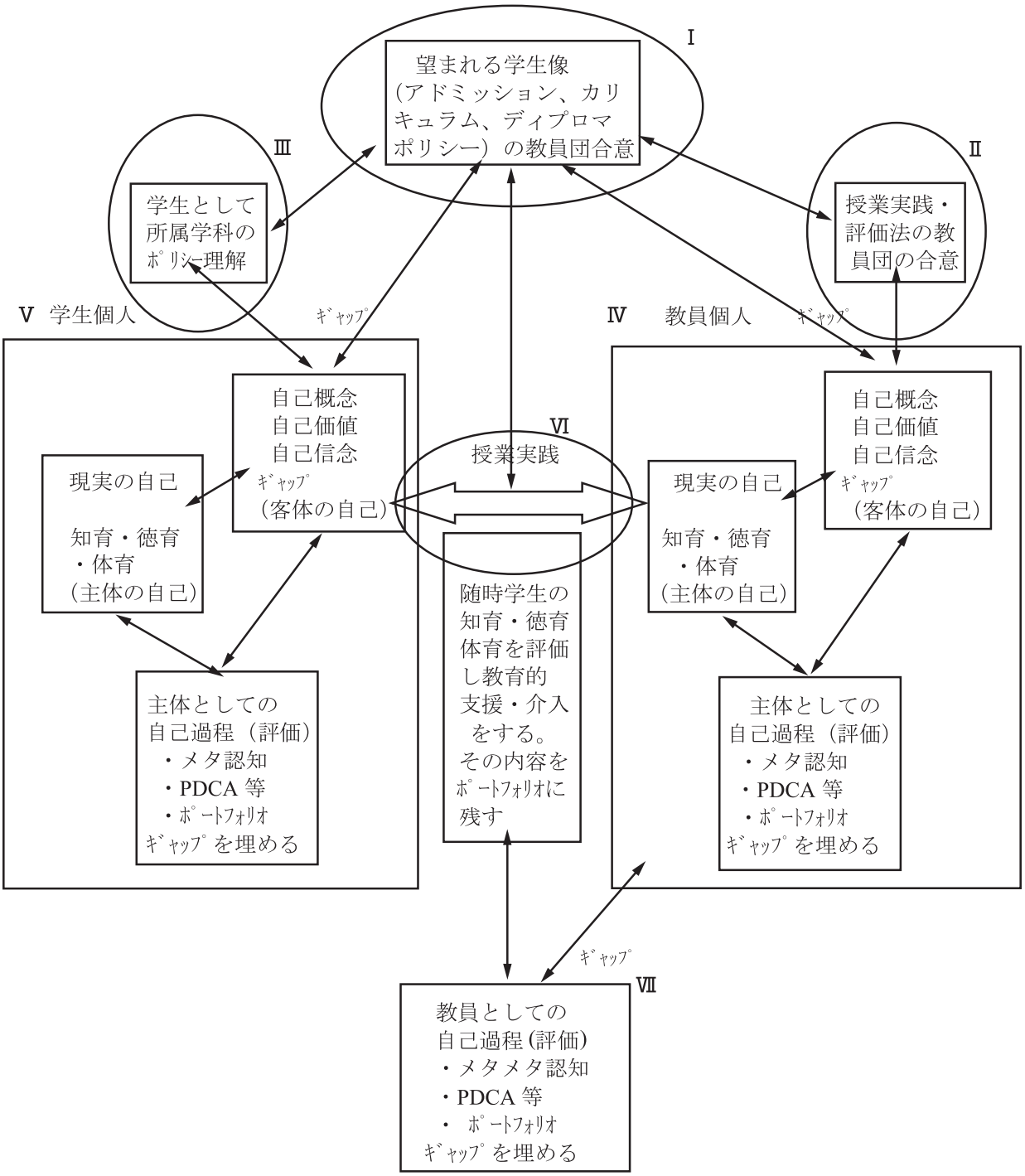

図１　学習構造の静的概念

四角で囲んだ「Ⅳ　教員個人」には、一人の人間としての教員が、教員団で合意した３つのポリシーや、授業実践・評価法などを自己としてどのように概念化・価値化・信念化しているか（客体の自己）の部分がある。しかし現実の自己（主体の自己）は、評価基準としての知育・徳育・体育に照らすと理想とする「客体の自己」との間にギャップがあるのではないか。このギャップを埋めるため「主体としての自己過程」がある。四角で囲んだ「Ⅴ　学生個人」は、一人の学生として教員の場合と同様、教員団が示す３つのポリシーや、個々の教員及び友人を含めた授業実践を通して「客体の自己」を形成する。そして教員の指導・評価、学生個人の評価から「主体としての自己」を知り、「客体の自己」とのギャップを埋めるのに「主体としての自己過程」を実践する。楕円の「Ⅵ

授業実践」では個々の教員が計画に基づいて授業を行い、随時学生の知育・徳育・体育を評価しながら教育的支援・介入をする。四角で囲んだ「Ⅶ　教員としての自己過程」は教員が授業実践を通して教員個人のメタ認知過程、並びに学生のメタ認知過程を更に認知する「メタメタ認知」を行い、教員としてあるべき自己との間のギャップを埋める。

3．学習構造の動的概念とその要素

1）自己過程でのメタ認知と PDCA

1．で示した静的概念のうち、「現実の自己」を評価するための基準となる知育・徳育・体育の具体的内容は表１で示す６つの要素からなると考えている。評価の観点４つは初等中等教育で言う「関心・意欲・態度」「思考・判断（課題対応）」「技能・表現」「知識・理解」に類似したものを適用することが適切と考えられる。

表１　評価基準としての６つの軸

自己の範囲に留まる基準			他の人や事象と関わりのある基準		
軸１	軸２	軸３	軸４	軸５	軸６
学　力（知育）	人間性（徳育）	健康･体力（体育）	学　力（知育）	人間性（徳育）	健康･体力（体育）
評価の観点４つ	評価の観点４つ	評価の観点４つ	評価の観点４つ	評価の観点４つ	評価の観点４つ

６軸の内容定義は、2009年度名古屋学芸大学短期大学部研究紀要第７号の21ページに提示してある。当然のことながら要素個々について比較するためには、理想とする「客体の自己」の概念・価値・信念なども、６つの要素に区分しておかなければならない。「主体としての自己過程」は、近年「自己調整学習の理論」[1)] として重視されているもので、ギャップの検出、これを埋める手段・方法、今後のための対策など動的な概念である。これは教員自身にとっても重要な過程であるが、特に学生にとっては学習成果を大きく左右するもので、学習指導要領で言う「生きる力」、OECD の言う「キー・コンピテンシー」[2)] に繋がる概念である。自己過程のうち、メタ認知とは「自分自身の理解レベルをモニターして、理解がうまくなされているかを判断することをさす」[3)]。例えば文章を書いているとき、文章の構造が体系的・論理的であるか等を自分が評価しながら書いているなら、これはメタ認知の形態であると言える。さらにメタ認知能力とは、「人間が思考を行う場合に、自分で自分の思考を追跡し、その思考の過程の良否を自分で評価する能力である」[4)] と定義されている。自分のメタ認知過程や学生のメタ認知過程を、更に上から認知する思考過程は「メタメタ認知」であるとされている。

PDCA は既によく知られている P（Plan）、D（Do）、C（Check）、A（Action）の略で、物事の実施にあたっては、計画・実施・評価・改善が１つのサイクルとして状況に応じ有機的に活動することを要請している。学習においても重要な活動であって、メタ認知とは密接な関係にある。つまりメタ認知は PDCA の各時間断面における行動をモニターしながら情報を的確に捉え、必要な情報は直ちにフィードバックして行動の修正が図れるような一連の体制整備がされているかを自己評価することにある。PDCA はこれを動態化し目標を達成することにある。この際の行動履歴がポートフォリオとして蓄積される。例えばメタ認知はある判断をしようとしたとき、自分が判断するに必要な知識を十分持っているかどうかをチェックし、何が十分でないかを明らかにする。そして十分でないと判断したなら、知識を得るための行動へのフィードバック指令を出しているか認知することである。PDCA では知識を得ること、そして知識を得たら再度判断に移り、良ければ次のステップに進むという行動をとる。

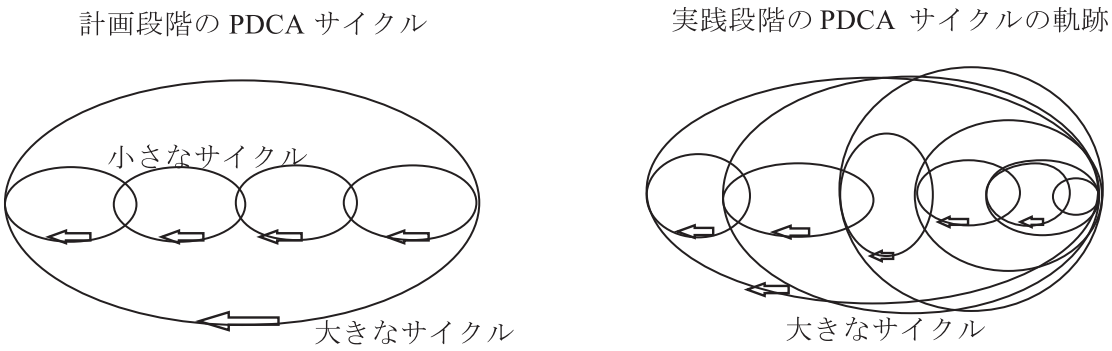

図２　PDCA の連鎖の概念

知識を得るための手立てはＰであり、知識を得る行動はＤであり、得た知識が十分であるかどうかの確認と再度の判断はＣである。この例は１つの判断をするという局所的なサイクルであるが、大きな PDCA では、メタ認知によって連続性・合理性・効率性の面から評価した行動計画を実施しつつ、次の行動に向けた施策を練る。それは先行する PDCA の結果が、以降の PDCA に影響をもたらすからであることと、一般的に施策にはいくつかの候補があるので、その中から最適なものを探すためであり、これらの思考過程はメタ認知にあたる。その概念は図２に示すように、小さな PDCA の連鎖として目標とする大きな PDCA を完成させることを考えれば理解しやすい。図２に示すように計画段階では整然とした PDCA の連鎖も、実践段階に入ると、先行する小さな PDCA の結果を受けて、以降の大きな PDCA を見直す必要が出てくるからである。状況に応じた対応を繰返すことによって、複雑な形になるが、これこそ現実を反映した有機的活動の軌跡ではなかろうか。

２）学習行動における PDCA の具体的内容

ここで学習行動を例として PDCA の内容を具体的に描いてみる。学習行動では教員、生徒、教材が主要要素である。図３は教員・生徒が併行して学習する場合を取り上げている。Ｐ段階での教員は、この講座、更にはこの講義時間で何をどの程度まで学んで欲しいのかを説明する。学生はその内容を自分の言葉で記録・表現できるところまで理解して欲しい。Ｄ段階で教員はテキストや自作教材を使って講義を行いつつ、学生の反応をみて学生の評価をしたり、自己の講義をメタ認知しこれを記録しておく。学生は自らが理解した学ぶべき内容を学び取れたのか、あるいは理解が違っていたのかなど心情も含めて記録しておく。Ｃ段階で教員は、まとまりのある小単元ごとに学習状況を学生の記録等も含めて評価する。自らの講義の善し悪しについても自己評価する。学生は教員の評価結果を受けて、自己の学習記録とあわせて自己評価をする。Ａ段階では教員並びに学生が、自己評価の結果に基づき意見交換と改善策を検討する。教員は講座全体計画の見直し、講義方法の見直しを行い、学生は自らの生活リズムに合わせて、学習計画や、学習方法、学習記録の方法を見直す。このような PDCA サイクルは図２に示すように、幾重にも重なって日々行われている。

自己過程におけるポートフォリオは、教員･学生共、おもに DCA 過程の状況を「知識･理解、思考･判断、技術」などの認知的側面および「意欲・価値観、自己省察、困難体験」などの情意的側面における心の動きを鮮明に記録するものである（医学教育ポートフォリオ）[5]。学習観からすると構成主義[6] の立場に立った教材となるもので、学習効果を左右する重要な要素と考えられる。

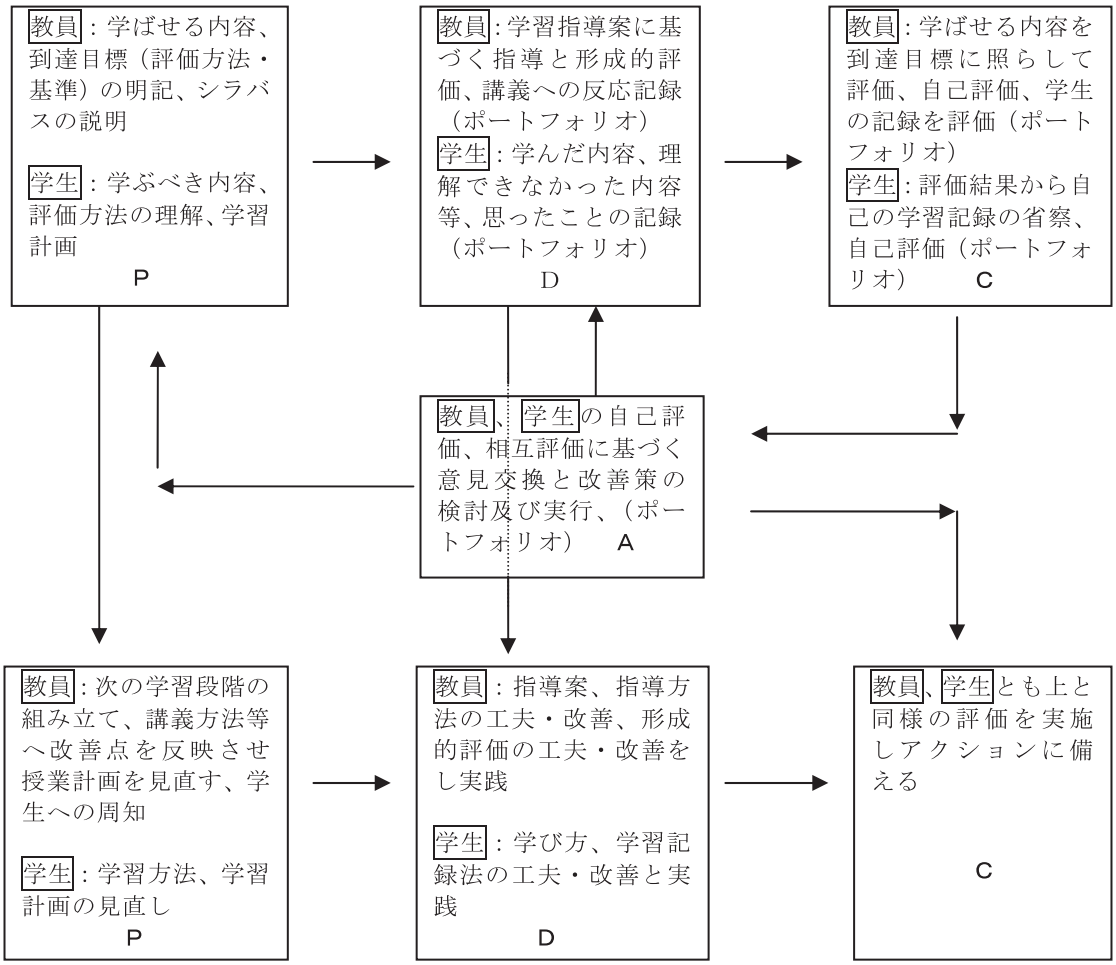

図３　学習行動における PDCA

４．評価の観点を意識化させるシラバスの工夫

学生が個人で学部・学科のポリシーや該当講座のシラバスを理解するのには、予備知識などから限界がある。したがって教員が学生の既存知識に合わせて解説してやる必要がある。さらに評価基準は具体的な説明をしてやらないと、考査の直前に出題傾向について若干の質問がある程度で大切さの意識が乏しい。学部･学科のポリシーや該当講座のシラバスの解説が必要な理由はここにある。

１）シラバスの役割

一般的に言えばシラバスはその講座で何のために何を学ぶのか、どのような学び方なのか、到達目標と評価基準はどのようなものかが分るものでなければならない。学生は履修科目の登録をするに当たって、必ず読むべきものであるが、あまり読んでいない、あるいは読んでも内容が十分理解できるまでの情報が載っていないという実態があるように思われる。平成20年12月24日付けの中教審答申、「学士課程教育の構築に向けて」の中では、シラバスとしておよそ次の内容を含めるべきとしている。①到達目標と学修内容の明記、②準備学習内容の指示、③評価方法と基準の明示、④シラバスの実態がコース・カタログ程度にとどまらないこと。確かに初等中等教育で行っている学期単位の授業計画や、これに基づく学習指導の細案、指導要録に記載する評価の観点などに類似するものは読み取れない。準備学習内容の指示などは、毎回の講義に先立って行うべきものであり、シラバス作成時期と位相が異なっていて記載しにくい。それゆえ高等教育が自学を尊重するもので

あることを思えば、毎回の講義に先立っての指示が極めて大切となる。

2）評価の観点を意識化させるシラバスの解説法

現在高等教育においては、図１で示したⅠ～Ⅶの全ての事項について、従来に増して考察することが望まれているが、本論文ではまずこれらの出発点となるであろうシラバスの解説法について具体論を展開する。シラバスの具備条件は１）で示した中教審答申が示唆する内容であるが、これを踏まえ、これをどのようにして学生に理解させるかを考察する。①の学修内容の明記は、テーマの解説にあたる。「何のために何を学ぶのか」「どのような学び方なのか」を明らかにしなければならない。しかし、これまでに学習した内容との関連もあるので、小単元毎の開始時点で解説しなければならない内容もあり、一度限りでは満足できない。Do 段階で適宜行う必要もある。到達目標の明記は、評価の観点（例えば表１で示すもの）を明確にし「いかなる内容について、どこまで解答できるか」「いかなる行動が出来なければならないか」を具体的・客観的に表現するものでなければならない。②準備学習内容の指示はシラバス記載時点ではキーワード程度となろう。これこそ「これまでに学習した内容との関連」もあるので小単元毎、あるいは講義毎に課題を与えることとなろう。③評価方法と基準の明示は、到達目標で明記した評価の観点（例えば表１で示すもの）毎に、目標レベルのどこまで達しているかが特定できるような尺度（例えば基準の最高レベルは要件10項目に言及していることとし、以下２項目が不足する毎にランク付けするなど）を明らかにすることであろう。

筆者は上述のような観点に配慮して、開講の第１回目にシラバスの解説をするために表２に示す資料「講義概要説明票」を使用している。シラバスには書ききれない「この講座で身につけさせたい力」について説明する。テーマの部分はこの講座に特定した内容を、シラバスの内容に照らし箇条書き的にまとめる。到達目標と評価方法は他の科目でも共通に使えるように考えた。元来到達目標と評価方法は表裏一体の関係にあることが望ましいので、１軸～６軸の観点について到達基準を定めて出題し、基準への解答度合いに応じて評定することとしている。しかし科目の特性から、６軸すべてにわたる到達目標、したがって出題内容となることは少ないので、その科目に応じた軸数で評定すればよい。総合評定は各軸の評定値を用いて算定するが、単純平均する方法、出題数の加重平均とする方法、各軸からなる平面の面積比とする方法などが考えられる。当然この方法も学生に知らせておく。

説明票の中の言葉の意味の表示は、「身につけさせたい力」を教員及び学生が共通理解するためである。１軸～６軸には殆ど同じ言葉が入っているが、それらが持つ意味は違っている。たとえば同じ「知識・理解」でも、１軸の教科における「学力」としての一項目は「学習指導要領の役割」を知ることであり、２軸の「豊かな心」としての一項目は「教員としての規範意識」を知ることであり両者は異なる。

表２　講義概要説明票（教員作成→講義開始時、学生に配布説明→学生保管）

授業担当者　○○○○

科　目　名　　教師論　　連番（　　）：　単位数（　　）

<table>
<tr><td rowspan="3">身につけさせたい力（どんな形の、どんな内容か）</td><td colspan="2">授業概要（シラバスの概要）</td></tr>
<tr><td colspan="2">テーマ：①教員の使命・職務・責任・教育的愛情について理解する、②社会人・教員としての対人間関係を理解する。③生徒理解と学級経営法を身につける、④自己の教員としての適性を知り資質・能力向上に努める
到達目標：このテーマにおいて教えようとする内容は、１軸～６軸の欄の項目中、四角で囲まれた観点についてです。具体的に何が身に付いたか、何が出来るようになったかを自分の言葉で文章表現できること。
評価方法：目標で示した四角で囲まれた観点から評価する。各単元で要点をまとめる。要点を自分の言葉で何個記述できるかが評価の８割、レポートの内容や授業態度が２割。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（１軸～６軸で示す言葉の意味は下記の通りです）</td></tr>
<tr><td></td><td>知識・理解…ある事柄を知りその意味・内容が分る
技能…あることを行うための技術的な能力
思考力・判断力…物事を考え正しく評価する力
表現力…心・感情・精神を他人が分る形で示す力
問題発見能力…何が問題かに気づく力
総合力・問題解決能力…知識・理解、思考・判断、技能・表現を生かして問題を整理し解決する力
生涯学習力…一生を通して学ぶ意欲と知識が湧いてくる
学ぶ意欲・興味・関心…学ぼうとする気持ちを起こさせてくれる理由が見つかる
主体性・挑戦性…自分の考えで物事に立ち向かわせてくれる理由が見つかる
学び方…どのような学び方が意欲を湧かせ、知識・理解、思考・判断、技能・表現の力をつけさせるか</td><td>実践力を高める行動…学んだことを実践に移させる力をつけさせる

節度ある生活…行き過ぎのない健全な生活
自主・自律…自分の考えで物事を処理できる
誠実…真心を持って物事に対応する
真理の探究…正しい物事の筋道を求める
規範意識…世の中のルールを守る強い気持ち
忍耐力…苦しいことに耐える力
受容…外からの刺激を受けいれ・受け止める
公共・共生…義務と権利を行使し、社会発展へ関与する
公正公平…偏った判断や行動ではない
リーダーシップ…指導者としての能力</td></tr>
<tr><td rowspan="3">学習者自身に関わること</td><td>１軸（学力）</td><td>学習者自身の学力として身につけさせたいものは
（知識・理解）（技能）（思考力・判断力）（表現力）（問題発見能力）（総合力）（問題解決能力）
（生涯学習力）（学ぶ意欲・興味・関心）（主体性・挑戦性）（学び方）（実践力を高める行動）</td></tr>
<tr><td>２軸（豊かな心）</td><td>学習者自身が豊かな心を育てるために大切なこと。具体的には自らを律する範囲の内容で、節度ある生活、自主・自律、誠実、真理の探究、規範意識、忍耐、受容に関係する力で
（知識・理解）（技能）（思考力・判断力）（表現力）（問題発見能力）（総合力）（問題解決能力）
（生涯学習力）（学ぶ意欲・興味・関心）（主体性・挑戦性）（学び方）（実践力を高める行動）</td></tr>
<tr><td>３軸（健やかな心と体）</td><td>学習者自身が健やかな心と体を保ち、また発展させるため大切なこと。すなわち生活習慣（食事・睡眠・運動）、健康管理、情緒の安定、心と体の健康保持・増進、体力の向上、及びこれに関わる人的・物的環境保全等に関係する力で
（知識・理解）（技能）（思考力・判断力）（表現力）（問題発見能力）（総合力）（問題解決能力）
（生涯学習力）（学ぶ意欲・興味・関心）（主体性・挑戦性）（学び方）（実践力を高める行動）</td></tr>
</table>

他の人や物に関わること	4軸（学力）	学習者を取り巻く集団・環境の中で、他と協調・協働しながら自他の学力を伸ばすのに関係する力で （知識・理解）（技能）（思考力・判断力）（表現力）（問題発見能力）（総合力）（問題解決能力） （生涯学習力）（学ぶ意欲・興味・関心）（主体性・挑戦性）（学び方）（実践力を高める行動）（リーダーシップ）
	5軸（豊かな心）	学習者を取り巻く集団・環境の中で、他と協調・協働しながら自他の豊かな心を育てるために大切なこと。具体的には協調、思いやり、尊敬、公共・共生、規範意識、公正公平などに関係する力で （知識・理解）（技能）（思考力・判断力）（表現力）（問題発見能力）（総合力）（問題解決能力） （生涯学習力）（学ぶ意欲・興味・関心）（主体性・挑戦性）（学び方）（実践力を高める行動）（リーダーシップ）
	6軸（健やかな心と体）	学習者を取り巻く集団・環境の中で、他と協調・協働しながら自他の健やかな心と体を保ち、また発展させるために大切なこと。すなわち自己の範囲を超えた領域にわたり、心と体の健康保持・増進、これに関わる人的・物的環境保全等に関係する力で （知識・理解）（技能）（思考力・判断力）（表現力）（問題発見能力）（総合力）（問題解決能力） （生涯学習力）（学ぶ意欲・興味・関心）（主体性・挑戦性）（学び方）（実践力を高める行動）（リーダーシップ）

3）セメスタの中間および終了時における教育的支援・介入

筆者は講義の８回目に評価の観点に沿った問題で中間テストを実施している。学生に返却した後、評価方法に照らして知識・理解はどの部分で何割か、思考・判断はどの項目でどう記述すべきか、また何割かなどを解説する。こうすることによって、学生は評価方法に照らして自己評価をし、今後の受講方法や自学の方法の改善策を立てることが出来る。

セメスタ終了時点の考査も同様に行っているが、採点結果についてのコメント時間が十分に取れていない。ここで行いたいことは表３に示す「修得内容確認票」を使って学生が学んだことの整理・確認と該当学科のカリキュラム・ポリシーの観点から他の科目との関連を説明したいことである。

表３　修得内容確認票（考査終了時点、学生が自己評価→保管）

学籍番号　　氏名

科目名　教師論　　連番（　　）：　単位数（　　）

<table>
<tr><td rowspan="5">修得したと思える力（どんな形の、どんな内容か）</td><td colspan="2">学ぶべきこと（シラバスの概要）</td></tr>
<tr><td colspan="2">テーマ：①教員の使命・職務・責任・教育的愛情について理解する、②社会人・教員としての対人間関係を理解する。③生徒理解と学級経営法を身につける、④自己の教員としての適性を知り資質・能力向上に努める
到達目標：このテーマにおいて教えようとする内容は、１軸～６軸の欄の項目中、四角で囲まれた観点についてです。具体的に何が身に付いたか、何が出来るようになったかを自分の言葉で文章表現できること。
評価方法：目標で示した四角で囲まれた観点から評価する。各単元で要点をまとめる。要点を自分の言葉で何個記述できるかが評価の８割、レポートの内容や授業態度が２割。</td></tr>
<tr><td colspan="2">（１軸～６軸に記述する内容の観点は下記の通りです）</td></tr>
<tr><td>知識・理解…ある事柄を知りその意味・内容が分かった
技能…あることを行うための技術的な能力が身に付いた
思考力・判断力…知識・理解をベースとして物事を考え正しく評価する力がついた
表現力…心・感情・精神・考えを他人が分る形で説明できる
問題発見能力…何が問題かに気づく力が身に付いた
総合力・問題解決能力…知識・理解、思考・判断、技能・表現を生かして問題を整理し解決する力がみについた
生涯学習力…一生を通して学ぶ意欲と知識が湧いてきた
学ぶ意欲・興味・関心…学ぼうとする気持ちを起こさせてくれる理由が見つかった
主体性・挑戦性…自分の考えで物事に立ち向かっていく理由を見つけられるようになった
学び方…意欲を湧かせ、知識・理解、思考・判断、技能・表現の力がつく学び方が分った</td><td>実践力を高める行動…学んだことを実践に移させる力がついた

・以下の内容を具体的に説明できるようになった
節度ある生活…行き過ぎのない健全な生活
自主・自律…自分の考えで物事を処理できる
誠実…真心を持って物事に対応する
真理の探究…正しい物事の筋道を求める
規範意識…世の中のルールを守る強い気持ち
忍耐力…苦しいことに耐える力
受容…外からの刺激を受けいれ・受け止める
公共・共生…義務と権利を行使し、社会発展へ関与する
公正公平…偏った判断や行動ではない
リーダーシップ…指導者としての能力</td></tr>
<tr><td rowspan="3">学習者自身に関わること</td><td>１軸（学力）</td><td>学力として身についものは次のこと</td></tr>
<tr><td>２軸（豊かな心）</td><td>自分の豊かな心を育てるために大切なこと。具体的には自らを律する範囲の内容で次のこと「節度ある生活、自主・自律、誠実、真理の探究、規範意識、忍耐、受容に関係する力」</td></tr>
<tr><td>３軸（健やかな心と体）</td><td>自分が健やかな心と体を保ち、また発展させるため大切な次のこと。「生活習慣（食事・睡眠・運動）、健康管理、情緒の安定、心と体の健康保持・増進、体力の向上、及びこれに関わる人的・物的環境保全等に関係する力」</td></tr>
</table>

他の人や物にかかわること	4軸（学力）	自分を取り巻く集団・環境の中で、他と協調・協働しながら自他の学力を伸ばすのに関係する力で次のこと
	5軸（豊かな心）	自分を取り巻く集団・環境の中で、他と協調・協働しながら自他の豊かな心を育てるために大切な次のこと。「協調、思いやり、尊敬、公共･共生、規範意識、公正公平などに関係する力」
	6軸（健やかな心と体）	自分を取り巻く集団・環境の中で、他と協調・協働しながら自他の健やかな心と体を保ち、また発展させるために大切な次のこと。「自己の範囲を超えた領域にわたり、心と体の健康保持・増進、これに関わる人的・物的環境保全等に関係する力」

まずは開講時の解説で使った「講義概要説明票」を持参させてこの科目のテーマ、到達目標を確認させる。「修得内容確認票」の「修得したと思える力」の部分は説明票と殆ど同じである。しかし１軸～６軸に記述する内容の観点の表現は、～が理解できた、～が出来るようになった、～の力がついたなどのように、自己評価したことを具体的に自分の言葉で記述することを望んで書き直してある。１軸～６軸の空欄にはその内容を書き留めてもらう。教員としては「表２　講義概要説明票」で修得を期待した内容を、１軸～６軸にわたって再度解説し、学生は自分が確認した内容と照合しつつ自己評価を見直す。不足部分や解釈の相違があればこれは図１で示した「主体の自己」「客体の自己」のギャップであるから「主体としての自己過程」を取ることになる。これまでに述べた教育的支援や介入の状況はポートフォリオとして記録しておく。

筆者はセメスタ開始の第１回目講義の時に「表２　講義概要説明票」を使って講座内容を説明し、セメスタ終了の考査後「表３　修得内容確認票」と履修の手引きに載せてある「シラバス」を使って学生に何を学んだか自分の言葉で記述させる試み（自己評価）を行った。対象科目は教職専門科目と学生が所属する学科の専門科目とした。全学生の記述内容の平均を教員が期待した学修成果に照らしてみたところ、教職専門科目については約30％、専門科目については約50％で多分に改善の余地があることを実感した。このギャップを埋めるための対応策が今後の課題である。

該当学科の他の科目との関連説明は、カリキュラム編成の意図を学生に理解させキャリア形成（生涯にわたり個人がすべての生活空間において、行動の基礎として保有する知識・技能・意欲、かつ、その行動が働くことに深く関わる力量の形成）[7]の道筋を実感させたいためである。教員団が合意してこれを行えば、図４に示すように科目間の繋がりが俯瞰できることによって各科目の意義の理解が一層深まるとともに、知識が体系化されることによって課題発見能力や解決能力、創造力も高まると期待される。しかし前にも述べたように、現実にはこのような支援・介入をする時間が確保出来ていない。また学生はセメスタ終了時点でその科目は終わったもののように捉えているので、関連を知ろうとする意欲も湧かないかも知れない。科目横断的な支援・介入をする時間を入学年度から卒業年度にわたってセメスタ毎に別枠で設け、しかもこれを正規の単位に組み入れなければ実現は難しい。

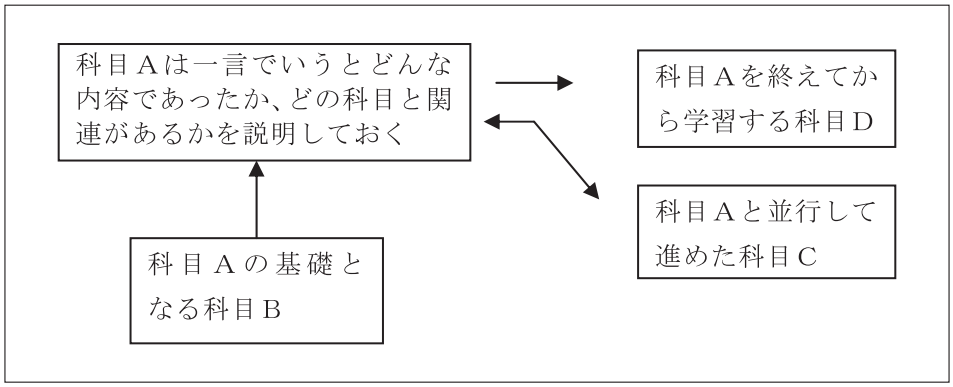

図４　科目間の繋がりのイメージ

５．シラバス解説に係る教員団の合意形成

１）中教審が答申した内容との関連

これまで筆者が個人的に試行しているシラバスの解説法を示してきたが、学生にとっては特定の科目だけでなく、自分が学修する全ての科目について理解が深まらなければキャリア形成に繋がらない。そのためには教員団が学部・学科のポリシーやシラバスの解説法について合意し、同調した指導をしなければならない。このことの実現に当たっては制度的整備と教員団の合意が必要である。平成20年12月24日付の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」は、第２章第２節の１（３）具体的な改善方策において「順次性のある体系的な教育課程の編成」「多様な学問分野の俯瞰を可能とする教育課程の工夫」「キャリア教育を…教育課程の中に位置付ける」「豊かな人間性や課題探求能力等の育成に配慮した教育課程の編成・実施」などを掲げている。これらについての制度的整備は既に行われているが、具体的運用法の整備については十分とは言い難い。たとえば卒業までの各セメスタで「順次性のある体系的」カリキュラムを、学生がいかに達成したかの検証はどのようにしているのだろうか。キャリア教育については「教育課程の中に位置付ける」として講座を立ち上げているものの、従来の進路指導的内容を各セメスタに分けて展開しているに留まっているように思える。各科目との連携をいつどのように取っているのだろうか。教職課程履修者には平成22年度入学生から卒業年次の後期に「教職実践演習」という科目が必修となったが、キャリア教育の趣旨に照らせば、入学年次からこの科目に向けた対応が必要と思われるが、それが行われているのだろうか。筆者はシラバスの解説法を足がかりにして、中教審が答申した上記改善方策を教員団の合意形成をもとに推進したいと考える。

２）学科のポリシーやシラバスの解説を科目横断的に行う試み

筆者は教職課程を担当しているが、先にも述べたように科目横断的な支援・介入をする時間を、入学年度から卒業年度にわたってセメスタ毎に別枠で設ける必要性を感じている。中教審大学分科会は平成21年８月26日付の「中長期的な大学教育の在り方に関する第二次報告」の中で、「キャリアガイダンスの大学教育への位置づけ」は「入学時から」学年進行に併せ、しかも「教育活動全体を通じて」推進するよう提言している。現在も行われている「ゼミ」はキャリア形成を目指すものと言えるが、グローバル化への対応という面ではキャリアガイダンス的で広がりのある発想の導入が必要なのかも知れない。

初等中等教育のキャリア教育については、平成18年11月に文部科学省が提示した「小学校・中学校・高等学校　キャリア教育の手引き」があるが、ここでは「入学時から」学年進行に併せ、しか

も学習指導要領の内容と対比しながら「教育活動全体を通じて」の方法が詳しくまとめられている。中でも小学校から高等学校を通じて「キャリア教育推進」の軸（４領域８能力）を表４に示すように定め、これに照らしながら学年進行に応じてキャリア教育の具体的内容が考察できるように配慮してある。

表４　初等中等教育におけるキャリア教育展開の構造

推進の軸と理解される内容（筆者がそう判断した）		小学校			中学校	高等学校
		低学年	中学年	高学年		
領域	能力説明	育成が期待される具体的な能力・態度				
人間関係形成能力	・自他の理解能力 ・コミュニケーション能力	…… ……	……	……	……	……
情報活用能力	・情報収集・探索能力 ・職業理解能力	……	……	……	……	……
将来設計能力	・役割把握・認識能力 ・計画実行能力	……	……	……	……	……
意思決定能力	・選択能力 ・課題解決能力	……	……	……	……	……

これは「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」と題する詳しい表であるが、筆者が要点のみを把握できるようにするためかなり簡略化してしまった。筆者がシラバスの解説に６軸を定義してどの科目にも共通して講義概要説明に使えるよう考えた票（表２）は、構造的にこれと似ており、学生への学修法の形式陶冶を図ろうとした趣旨が、ある程度妥当のものであったことの検証になると意を強くしている。

筆者が属する教職課程では、卒業年次の後期に開講される「教職実践演習」に向けて、本年度より「ポートフォリオ指導」という講座を、30名を１クラスとして開講した。ここでは「5W1H ＋メタ認知能力（自己の思考・判断の記述）」の訓練、図５に示すトゥールミンモデル[8)]を使った「文の構成と論証の正確化」の訓練のような基礎的学習から、学科のポリシーやシラバス解説の補充、資格取得に見合う修得単位数の確認、その他各種の科目横断的な支援・介入を行っている。この講座は単位として認めているものではないが、学生は多くの科目の学習において大変役立っていると評価している。

その一例として「5W1H ＋メタ認知能力」「文の構成と論証の正確化」の指導を受けたことに対する学生の感想には次のようなものがある。◇「ニュースを聞いたり、本を読むとき 5W1H を意識するようになった。簡潔に内容を理解することができることを改めて実感した」◇「自分で学習するときやレポートを書くとき役に立っている」◇「兄弟に勉強を聞かれたとき、根拠があるからこの結果になっているという説明が出来るようになった」◇「事実、根拠、主張も考えるようになって文章を分かりやすく書けるようになった」◇「友達に話をするとき、相手が想像しやすいように話すようになった」◇「人が話しているとき 5W1H が入っているか気にするようになった」◇「『5W1H ＋メタ認知』を意識して文章を書くようになったし、全体の意味をとらえるために読み直しをよくするようになった」◇「文章をまとめることが早くなった」◇「文章を書くとき構成を気に掛けるようになった」◇「『5W1H ＋メタ認知』『根拠と理由に基づく結論』を活用して文章を書くように心掛けている」◇「説明方法や意見の言い方に気をつけるようになった」◇「『5W1H ＋メタ認知』を意識して生活するようになった」◇「最近行ったテストの記述問題への解答に『5W1H ＋メタ認知』を頭に浮かべ行った」◇「自分の伝えたいことを前よりも簡潔に伝えられるようになっ

た」◇「自分にも思考の要素がついてきたのかなと思う」◇「文章がスラスラ書けるようになったかなと思う」◇「自分で勉強するとき、まずは整理のため『5W1H』をみつけ、これをまとめるようにしている」などである。

この「5W1H＋メタ認知」指導に対する42通の感想文の中で、上に述べたような「効果があった」とする記述をしたものは32通で約76％にあたる。感想文は率直な意見を知るため、自分だけに分かる暗号を氏名代わりに書かせたが、否定的なものは１通も見あたらなかった。感想文は暗号に基づいて各自が持ち帰り、ポートフォリオとしてファイリングした。

この一試行結果から見ても、シラバス解説はもとより、学部・学科のポリシーや、ものの見方・思考の仕方など学修全体に関わる横断的な支援・介入の講座を別枠で設け、教員が同一歩調で協働すれば学修効果が上がるであろうことを実感した。こうすることが学生に当該科目、引いては自己の学部・学科の意義を俯瞰し、学修成果を高めることにつながると言えよう。

筆者が属する教職課程で試行しているこの講座では、学生･教員双方の図１で示した自己過程を、全てポートフォリオとして各自のファイルに綴じ込んでいる。「教職実践演習」の講座ではこのポートフォリオを重要な資料として「教職実践演習」のテキスト作成に活用することを考えている。「教職実践演習」が教員というキャリアを形成するための、「キャリア教育の総仕上げの科目」であるとすれば、教員以外のキャリア形成におけるキャリア教育についても、入学年次から科目横断的な支援・介入の教育課程を編成しておく必要があるのではないか。

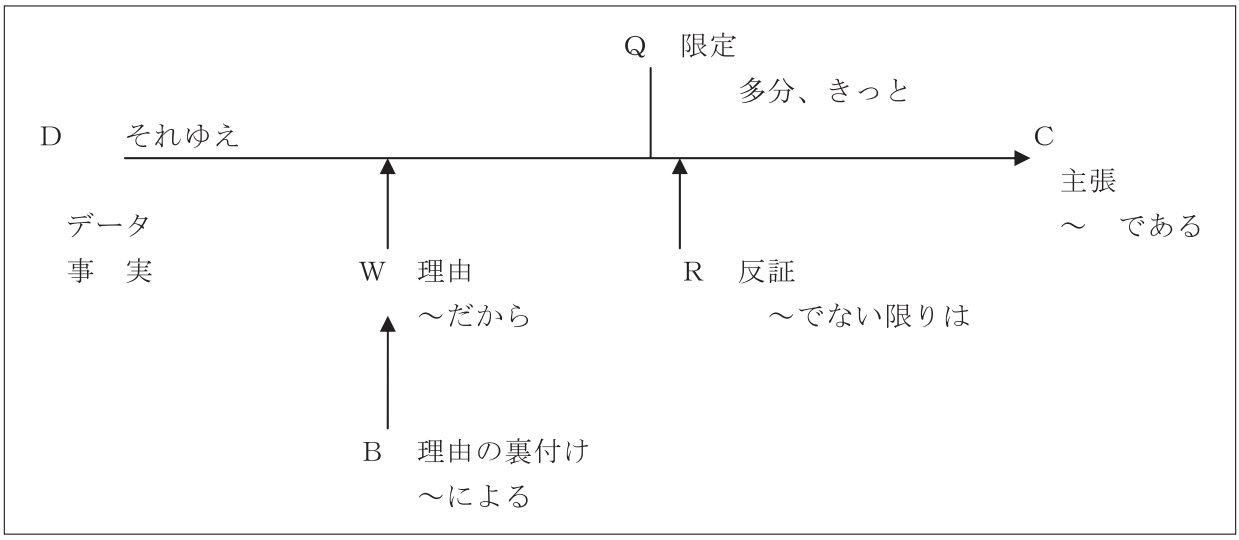

図５　トゥールミンモデル

６．学修内容の体系化と有機的結合

卒業に向けて行うゼミの役割は、これまでに受けてきた講義、演習、実習、考査並びに教育的支援･介入などにおいて生成蓄積してきた知識・技能・思考力・判断力・表現力・ポートフォリオを、ディプロマポリシーの整理項目に従って整理し、当該キャリアとして望まれる資質・能力をバラバラのものでなく体系化し、有機的に結合できるよう仕上げることであろう（図６、７）。それはあたかも図書館の書架のように書架方式に従って配列し、必要に応じて自由自在に検索し結合して課題解決が出来るようにすることと似ている。書架に載せる書籍は学生が習得した知識・技能・思考力・判断力であり、ポートフォリオであるから、これは入学以降の各段階で獲得してもらわなければならない。有機的に結合する力は思考力や判断力、表現力、創造力で、これを高めるには多くのシミュ

レーションが必要である。この講座を担当するには、これに耐えられるテキストと包括的な指導力が望まれよう。総仕上げにあたっては、体系化と有機的結合に関する教員間の合意形成と、教員自身の絶えざる研究・協働が不可欠である。

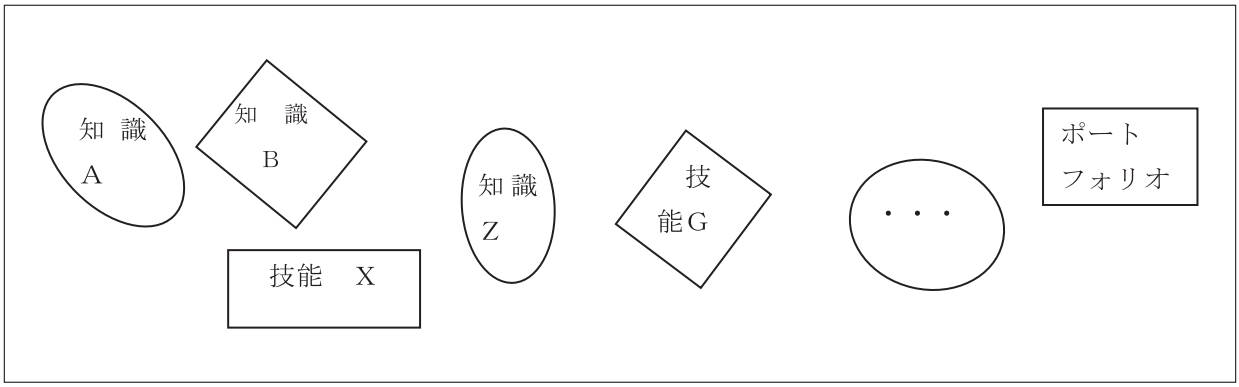

図６　バラバラの知識・技能、ポートフォリオ

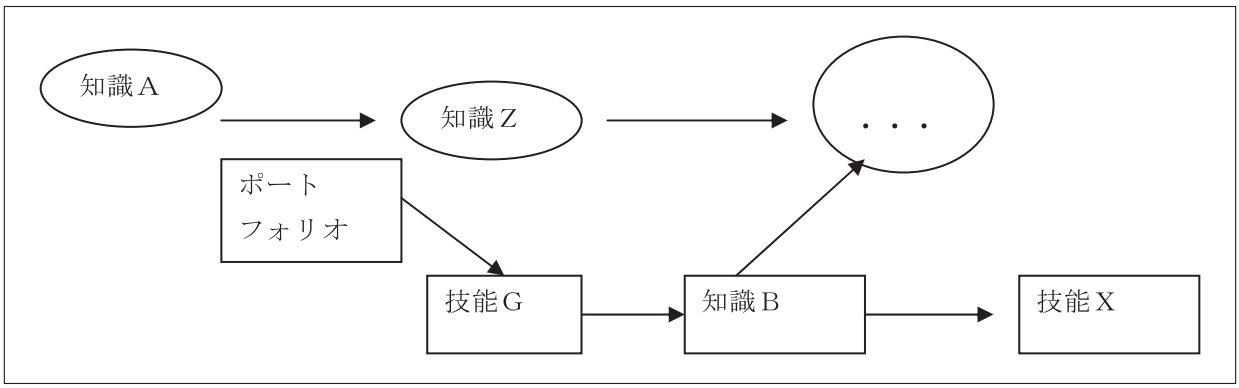

図７　知識・技能、ポートフォリオの体系化、有機的結合

７．考察・結論

シラバスの解説法を手始めとして、「学生が自己の学ぶ分野を俯瞰しながら、体系的に学習を進めることが学修の成果に繋がる」という仮説の下に、「２．学習構造の静的概念」「３．学習構造の動的概念とその要素」を考察の基本に据え、「４．評価の観点を意識化させるシラバスの工夫」では「表２　講義概要説明票」を使い、教職専門の１科目について学ぶ内容と評価の観点を含め解説する試行をしたことについて述べた。そして考査後「表３　修得内容確認票」を用いて学生が学んだことの整理・確認を試みたことを記した。「５．シラバス解説に係る教員団の合意形成」では、文部科学省の提言する「キャリア教育推進」との関連において「教職実践演習」開講に向けてのポートフォリオ蓄積を実施していること、その中で教員の指導内容の一例に学生がどのような感想を述べたかについて紹介した。

しかし表２、表３を使ったシラバスの解説と学生が学んだことの整理・確認についての試行は十分と言えない。また、図４で示す科目間の繋がりについては、その分析法の構想はあるものの具体的記述には至っていない。「５．シラバス解説に係る教員団の合意形成」においても一試行例を示したに過ぎない。その意味で「学生が自己の学ぶ分野を俯瞰しながら、体系的に学習を進めること

が学修の成果に繋がる」という仮説の検証は局所的であり、これが今後の大きな課題であるが、考え方の道筋としては大きく逸れていないと思う。

本論文を纏めて行くうちに改めて分ったことは、①常にシラバスの内容、より具体的には常に学習している道筋を見失わないような指導、他の科目との関連の指導、②科目ごとに講義と考査が終わった後の学んだことの整理・確認の必要性、③これらを行うには教員団の合意形成のための場の設定、合意に基づく協働（たとえば科目間の関連研究）が大切であること、④何よりもこれらを行うための時間を別枠で設ける必要のあること、そして⑤これらを進めるための制度整備には平成18年11月に文部科学省が提示した「小学校・中学校・高等学校　キャリア教育の手引き」や教員養成課程を有する大学で行う「ポートフォリオ研修」などが参考になることである。

引用・参考文献

1）バリー・J・ジャーマン、ディル・H・シャンク　編著：塚野州一他　編訳、自己調整学習の理論、北大路書房、85－96、2006

2）黒澤宣輝：生涯にわたるキー・コンピテンシーの形成パターンとその統一的評価尺度に関する研究、名古屋学芸大学短期大学部研究紀要、第７号、15、2010

3）米国学術研究推進会議編著：森　敏昭・秋田貴代美監訳、授業を変える―認知心理学のさらなる挑戦―、45、北大路書房、2004

4）http://www2.tba.t-com.ne.jp/Temzzin/cnt/bunsho/bin/bin2_2.html

5）http://www.igaku-portforio.net/top.htm

6）前掲１）自己調整学習の理論、北大路書房、252－254、2006

7）仙崎　武　他：キャリア教育の系譜と展開、104－108、財団法人雇用問題研究会、2008

8）井上尚美：思考力育成への方略、82－85、明治図書、2007